

## アレッサンドリア、コミュニティ・地域環境再生活動の視察

市民の居場所づくりから、まちづくりへ

## 【キーワード】

〔施設種別〕高齢者施設 障がい者施設 子ども施設 住宅（住宅型ホテル） 地区の家，他  
 〔運営主体〕市区町村 法人 NPO 個人 社会的協同組合  
 〔建物形式〕1棟単体型（分散） 複数棟集合型 団地型 集落  
 〔建物状況〕新築 増築 改修 一部改修 既存  
 〔対象者〕高齢者 障がい者 子ども ファミリー 多世代 移民



写真1 アレッサンドリア庭園 Giardini Pubblici

ピエモンテ州南部の都市、アレッサンドリアでは、社会的協同組合などの地域のNPO団体が連携してまちの活性化や社会的弱者を含む社会的包摂がなされたコミュニティづくりに取り組んでいる。多様な事業の組み合わせによって住民たち自身の手で地域経済を回す仕組みは、今後の地域づくりにおける、小さいが力強い基盤となっていく。

視察月日 11月5日

記録担当者 佐藤榮治，土田寛

案内者 ファビオ・スカルトウリッティ氏（社会的協同組合 Associazione Comunità San Benedetto al Porto，アレッサンドリア支部の代表）

フェデリコ氏（組合スタッフ）

多木陽介氏（通訳）



図1 アレッサンドリア (Googlemap)

## 1. アレッサンドリア Alessandria の概要と行程

### 1) アレッサンドリアの概要

アレッサンドリアは、ピエモンテ州南部の都市で、アレッサンドリア県のほぼ中央に位置する県都であり、周辺地域を含み人口約9万4,000人のコムーネである。周辺には、17の分離集落を有する。

街の北から西にかけてタナロ川が流れ、かつてはそれに平行した一辺を含む、東西に長い六角形の城壁に囲まれた城塞都市であった。現在はその城壁は撤去され、跡

写真1 ファビオ氏（代表）とフェデリコ氏  
スタートのホテルから視察を開始する。

が道路になって市街地をぐるりと囲んでいる。城塞跡道路の南東にアレッサンドリア駅があり、駅前の公園が市街地内で最も大きい緑地である。市街地には北西側（川の方）にかけて内部にゆるやかな起伏があり、街路に変化を与えている。

## 2) 行程と地図

地区の家と関連施設群を運営する社会的協同組合の代表であるファビオ氏と、スタッフのフェデリコ氏に案内いただき、拠点としたホテル(ホテル・アレッサンドリア)を出発地点として、旧市街地の、①中心広場（自由広場、現在は駐車場として利用されている）、から、②開発（店舗の入れ替わり）が進む通り、③古い商店、④開発が進む広場、⑤帽子ブランドのボルサリーノ本店、⑥自主的整備エリア、⑦地元衣料品店、⑧フェアトレードの店、⑨移民エリア、⑩ソーシャル・プロモーション・アソシエーション（移民支援のための拠点事務所）、⑪地区の家（移民がスタッフとして働くカフェ）、⑫市民菜

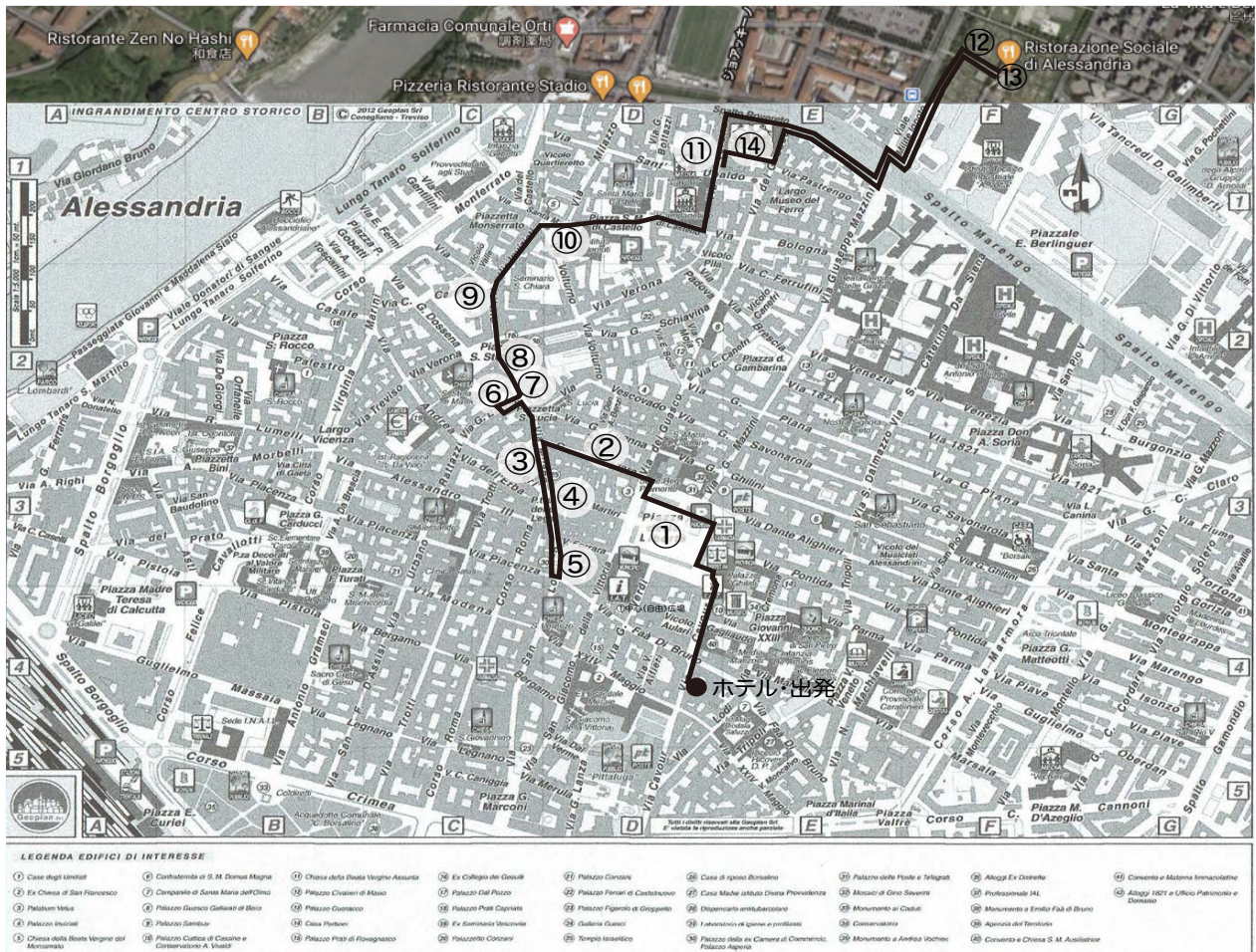


図2 アレッサンドリア視察の移動行程

園, ⑬ソーシャルレストラン, ⑭空き家再生の Second Hands, ⑫地区の家, と移動した。地区の家の報告は次章, 移動行程は図2に示す。

## 2. 各視察先の概要とインタビューの記録

### ①中心広場（自由広場 Piazza della Liberta)

街の制度的な中心地である自由広場(写真2)は、新聞社、イタリア国内でも有名なホール(コンサバトーレ)、イタリア銀行の本店、アレッサンドリア銀行など、アレッサンドリアの街と周辺地域の市政を整え統括する県庁的な役割を担う建物、郵便局(写真3)等、アレッサンドリアと周辺地域の生活を整えるための公的権力の中心であり、行政の中でも最も実質的な役割を担う組織の建物が広場に集まっている。今では駐車場になっているが、広場には昔大聖堂があった。ナポレオンがここに泊まったときに大聖堂があるために何も見えないと言い、壊させたと言われているが、その逸話が本当かどうかはわからない。10年前に駐車場を地下化することを試みたが、大聖堂の基礎が出て来てしまった。イタリアでは考古学的な遺跡が出てくるとそこには何も作れないため、それ以降、工事がストップしており、今に至る。

郵便局は、1920年前後までファシズムの時代で文化芸術の影響があった典型的な建物である。あらゆるコミュニケーションを表現した、38.5m×1mのモザイク画が施されている。

### ②開発が進む通り（ミリャーラ通り Via Migliara)

旧市街地は大きく分けて2つに分かれている。駅からホテル、広場北東までの商業的な活気があるエリアと、その西側の工房等が多い職人のエリアである。この場所(写真4)はその境目に位置するゾーンを貫く通りである。

20世期になってからお金のあるファミリーが街の中の建物や街区を購入し所有するようになると、行政の開発



写真2 自由広場

街の中心的広場。大聖堂のあった場所は現在駐車場。



写真3 郵便局

ファシズム時代の象徴的建物。



写真4 開発が進む通り

オレンジ色の建物は民間の開発



写真5 (上) 古い商店

写真6 (下) 古い商店の店主と話す

以外で、プライベートのファミリーが所有する部分が個別に開発（建物の改修と新規事業の割り付け）する事例が増えた。このように、街全体の商業や業務ゾーニングの構成に対して、民間が使い道を左右する形で介入してきている。

### ③古い商店

生活関連用品の雑貨屋として50年以上営業を続けてきたが来月にお店を閉める。近年の生活スタイルに対応した品揃えを確保できず、近隣のスーパーと競合した結果、経営継続が困難になったという。靴の手入れのための様々な用品や、洗濯用洗剤等の日用生活雑貨を扱っており、かつては街でここを使わない人がいない、生活に根ざしたお店だった。

### ④開発が進む広場 (Piazzetta Della Lega)

商業エリアの中心に位置する、三角形の小広場。中央には石造りのオベリスクが建っている。自由広場は権力の中心だが、ここは市民の生活の中心になる広場である。この20年でだいぶん街の雰囲気が変わった。かつては街の通りはすべてピンコロ石張りであったが、ここ10年ほどで舗装の敷き直しが進んでおり、今はこのレガ広場も含めて、より歩きやすいインターロッキング舗装に置き替わっていている(写真7, 8)。この新しい舗装は、街の人はあまり好ましく思っておらず、戻してほしいという声を聞いている。

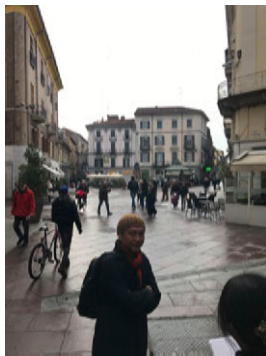


写真7 開発が進む広場



写真8 新旧の石畳

広場に面する劇場だった建物(写真9)は何年も空き家のままであったが、現在部分的にカフェとして使われるようになった。もともと街にあった昔ながらのお店、特徴のある個人商店は無くなっていき、世界的にも有名なブランドやチェーン店などどこでも同じような店が入り始めている。この広場の近くには靴作りで有名な工房もあったが、今はもうなくなっている。



写真9 元劇場のカフェ

黄色い建物が元劇場で、現在はカフェ

### ⑤帽子ブランドのボルサリーノ本店

イタリアのファッションを代表するブランドの一つであり、世界的にも有名な帽子ブランドのボルサリーノは

アレクサンドリアを発祥の地としている。ジャン＝ポール・ベルモンドの映画で世界的に有名になったが、本店は創業以来変わらずにレガ広場近くで営業している。

この店では、お客さんとの個人的な関係を大事にしている。現代的な商業施設であるショッピングセンターでは、ものの価値は品物と値段だけで決まるが、昔ながらの旧市街地では売る人と買う人の関係が大事にされており、購入価格が少し高くても人々はその関係性も含めて街場の商店街の商店で購入する。ボルサリーナの場合は世界的に有名になったが、他の店でも同じで、季節ごとのメンテナンスに訪れてもらう、お客さんが親から受け継いだ帽子の型を店でもずっと保管してあるなどの顧客との継続的な付き合いを大事にしている。こうした関係性は自分たちの仕事のしかたとしても大切なことで、遠い場所にいる人に売るのではなく、近くの人との関係の中で働いて売り買いをする。経済的なやりとりが、人間的なつきあいと共にあることが大切である。

## ⑥自主的整備エリアとお菓子の店

ミラノ通り Via Milano に直行する細い路地、ジュゼッペ・ビッサッティ通り Via G. Bissati。この通りの店の人たちは街の美しさを保つために自分たちでアクティブに活動している。昔ながらのピンコロ石張りの通りを整え、一定のルールの下で各店舗の前に植栽の鉢をならべ、揃いのフラッグを通りに共通して掲げている。通りも植栽にも手入れが行き届いており、街の景観を積極的に整えている様子をうかがうことができる。通りの入り口にある自家製造菓子の店 Cioccolato Di Ghibaudi Laura を尋ねたが、ここはとても評判が良く、繁盛している。

このエリアは職人街だが、近隣の職人の店は物が売れなくなって廃業するケースが少なくない。しかし、商品の質が非常に良い店や、近隣商店で協力して商売を盛り立てているところは、常連のお客さんもついて活発に営業を続けている。

## ⑦地元衣料品店

ミラノ通り Via Milano 沿いにある、個人経営の衣料品店 Corner Casual&Terraces。この店は、地元で買い物をすることがまちを守るのだというメッセージを店



写真 10 ボルサリーノ本店の外観



写真 11 ボルサリーノ本店の店内



写真 12 自主的整備エリア



写真 13 菓子の製造・販売のお店



写真 14 地元衣料品店の中



写真 15 地元衣料品店の外観



写真 16 (右) フェアトレードの店

頭に掲げ、ものの売り買いとまちづくりの融合を経営理念としている。この店ではアレクサンドリアまで徒歩か自転車で来た人には特別な割引をしており、近距離での商圈とエコへの意識を大事にしている。店主は、商売には商品のクオリティも大切だが、さらに街のアイデンティティにいかにか寄与することも大切だと考えている。そのため、どの場所でも同じように商売をするのではなく、この街で、この店に買いに来る人との人間的な関係を大事にしている。

一般の商業的な評価ではないかもしれないが、例えばこの店に来てマフラーを買い、ありがとうとだけ言って出て行くこともできるが、ついでにサッカーなどにかの話題を通して店主といろいろな話をしてマフラー以上のものを得て出て行く、といった関係性を大事にしている。サポート・コア・タウン・ストア（地域の互助の拠点となるまちの商店）は、自分たち自身のモードと、まちの維持のためにも重要である。

顧客との関係を大事にしていることの別の例として、クリスマスになると顧客にマイボトルを自分のロゴを入れてプレゼントする、という例も挙げられる。エコのため、イタリアではプラスチックを使わないようにしているので、マイボトルは重宝してもらえるし、店からのメッセージを顧客に発信していくことにもなる。

## ⑧フェアトレードのお店

イタリアや、ヨーロッパの北部に多いスタイルで、一つ一つの商品に対して、正規の金額が生産者に渡るように、流通、販売を行う仕組みのお店。生産者の尊厳を守り、生産者が新興国での生活レベルを守れる値段設定を行う。EQUO GARANTITO 傘下の alteomercato がフェアトレードの運営を支援している。先に援助の資金を渡すことに特徴がある。また、関係を始めた場合には長く続けることをモットーにしている。ビジネスとして商品価値が高くなるよう、イタリアの人の好みに合うようにデザインを助ける等の介入も行っている。

例えばコーヒー豆はペルーの小さな生産者の 3000 軒とコラボレーションして生産～販売までを行っている。生産者に対して、有機栽培であることなど品物の品質や生産過程での倫理を守るためのルールを遵守を求めるこ

とから、生産者の側にも一定の覚悟と見識が必要である。イタリア国内からは、マフィアから没収した土地で作られた農産物を販売したり、刑務所で作られたものを販売している。

エコロジカルな取り組みでもあり、生産者や街の人とのつながりを大事にしている。ただ、市場の価格よりも高く買うことは簡単なことではなく、このチェーン店を現場で運営しているスタッフは無償～廉価のボランティアに頼らざるを得ないなどの人件費上のコストカットの必要がある。

## ⑨移民エリア

急激な移民増に伴って、多くの移民が住んでいるエリア。もともと職人の工房と居住のエリアであったが、不景気で工房が廃業する等の影響によって空き家が増えていることから、このエリアに新住民として移民の流入が続いている状況である。アレッシサンドリアへの移民としては、地理的条件によってアフリカからの移民が多い。

移民の流入に付随して、治安の悪化や生活環境の悪化（さほど広さに余裕のない物件に、きちんとした回収もなく複数人が居住するなど）がこのエリアの問題となっている。このため、現在の劣悪な建物の改修や生活環境を、地元住民とともに協力しつつ、5-10年の中期的プランで改善する取り組みを始めた。



写真 17 移民エリア

## ⑩社会振興協会 Cambalache

国連難民組織 UNHCR から支援を受けて、移民の様々な支援をしている社会振興協会（Associazione di Promozione Sociale）である、Cambalache（カンバラチェ）<sup>1)</sup> のオフィス兼店舗（養蜂事業の製品等を販売している）、集会機能をもつ拠点である。この組織は、スタッフ 5 名、ボランティア 5 名で運営されている。なお、アソシエーションは事業コンペに勝って、プロジェクトごとにお金をもらう仕組みであり、ずっと続いている資金源を持っていない。現在この団体は、主にアフリカからの移民の対応を行い、滞在許可証発行のためのサポートや就労・居住の支援など、種々の職能をもつスタッフや連携会社がある。Cambalache は、難民や亡命者の支援運動である LOACCOLGO <sup>2)</sup> に参加している。

### 参考文献

- 1) UNHCR Italia, Cambalache – Bee My Job, <<https://www.unhcr.org/it/cosa-facciamo/partner/progetti/cambalache/>>, 参照 2020.09.23
- 2) #LOACCOLGO, <<http://ioaccolgo.it/>>, 参照 2020.09.23, 「私は歓迎します」キャンペーン。そのトップページには、「Partecipa a #IoAccolgo per dire no all'odio e all'esclusione e sì all'accoglienza, alla solidarietà e all'uguaglianza. #IoAccolgoに参加して、憎しみと排除に反対し、歓迎、連帯、平等に同意します。」というメッセージが掲げられている。このキャンペーンの目的は、市民社会組織、機関、労働組合の幅広い前線の主導により、亡命希望者およびイタリア政府が進める制限的な政策に強力かつ統一された対応をすることである。



写真 18 Cambalache のオフィス前



写真 19 Bee My Job の視聴後の質疑

Cambalache は、移民に仕事を教えることと、労働のチャンスのあるところに紹介することを主な目的としている。例えば農業に従事する人のかなりの割合が移民になっており、移民がいないと成り立たない。中には、搾取の事例もある。この移民の労働環境はイタリアでは社会問題になっていて、移民が奴隷のような低賃金で働かされていて、移民労働者の暴動が起きたこともある。

#### ■ 「Bee My Job」プロジェクトについて

2015 年から始まった、都市型の養蜂を移民支援として行う事業であり、「社会的養蜂」と称している。移民が BeeKeeper（養蜂家）と慣れるように技術を学ぶ支援をしており、これはみんなで巣をつくり、蜜を集めて集団を守るという蜂の習性が、共生をコンセプトに掲げる団体の事業としてふさわしいと考えたためである。養蜂の仕事を教えることが第一段階で、次に就労のチャンスがあるところに紹介することが第二の段階である。移民が養蜂を学んで、どこかに務めることができる段階になったら、仕事と住まいの面倒も見る。

#### Q. 何人くらいが職についた？

プロジェクトが始まってから、今まで事業全体で 170 人くらいが BeeKeeper として仕事をできるようになった。アレッサンドリアだけでなくロザルノ（カラブリア州レッジョ・カラブリア県）、エミリア・ロマーニャ州とイタリア国内の何箇所かでこの事業をしている。来年はフィレンツェとローマでも始める。

#### Q. 人手のニーズはあるのか？

養蜂場の人手はまだ求められている。ただ、世界的な傾向として、蜂が死んでしまうという被害が出ており、市場のニーズに対して生産量が不足している。蜂が死んでしまう原因は、農薬や気候変動等で、蜂の生存環境が悪くなっていることにあると考えられている。

#### Q. どのくらいの期間、就労支援を受けるのか？

ここでの訓練は 1 ヶ月。そのあと農家や会社に入って、約 1 年で一人前になる。言葉の問題や人間関係などが課題となって、上手く就労に結びつかない場合もある。自分たちが提供するのは就労経験であり、機会をつくるが、そのすべてが契約に結び着くというわけではない。別の農家に行って探す、別のセクターに再チャレンジする人もいる。



## Q. 他の仕事も選択できるのか？

工場に移民を紹介するプロジェクトもある。連携する社会的共同組合としては、移民だけが相手ではなく、若者や障害のある人の就労支援をしている。その就労支援の一環が移民であり、その場合にはイタリア語習得や労働安全の保障、免許取得の支援などが特徴となる。滞在許可申請のフォローが必要なこともあり、必要ある場合は警察までついて行く。難民で滞在許可証がない人が、難民申請をリクエストしても通らないことがあり、滞在許可証がまず必要になる。

## Q. アソシエーションの運営は？

この組織も NPO ではある。アソシエーション<sup>3)</sup>には収益の基準（どれくらいの収益を上げて良いか）もある。株式会社ではないので会員には収益から配当をすることはできないが、従業員は給与を得て良い。また、この養蜂の事業では利益が出るが、その利益をプールすること（内部留保）はできないため、アソシエーションの目的にそぐう別のプロジェクトに投資するなどの処理が必要である。人手としては、ボランティアに対して国の支援があり、4人はそうした方面からのスタッフである。心理学者の支援等が含まれる。アソシエーションの活動のためには予算が必要であるが、こうした事業に対しては組織でないと応募できないことになっている。事業は全て有期のコンペ方式で募集があり、毎年応募している。Bee my job は、成果が上がっているのので、継続的に就労支援事業費の対象になっている。

## Q. 移民は長くイタリアに滞在するか？

イタリアまで難民として来て、労働で滞在許可書を取るのとは相当大変であるが、だからといって帰りたい人はそんなにいない。イタリアに定住できてからの帰国者の例では、例えば紹介ビデオに登場したセネガル人は今では1年のうち1ヶ月は定期的にセネガルに帰って、故郷の人たちの生業となるよう、養蜂家を育てている。

## Q. Bee my job の支援対象者はどれくらいの頻度で来るか？

この1年ではここアレッサンドリア17人（トリノ、ミラノに住んでいる人を含む）、レッジョ・カラブリア（カラブリア州）10数人。ビーマイジョブ以外も含めると年間で300人くらい。これらの人たちがこの団体にとっての継続的な支援対象者となるとは限らず、滞在許可申請

3) イタリアの非営利活動団体の枠組みとして、アソシエーション Associazione があり、設立が容易で活発に活動が展開されている。主に2種類が広く知られ、該当数が多い。

### ■社会振興協会 Associazione di promozione sociale (APS)

会員や第三者への社会的利益をもたらす活動を目的として結成された、認知された団体（国・地方 regionale・州 provinciale に、目的・メンバー・内容等を登録し、決算報告義務を持つ）、また認知されていない運動、その他の社会的な集合体である。「ボランティアに関する基本法（1991年8月11日法律266号）」により、単純な任意団体は会員に報酬を与えられないが、社会推進協会は、特別な必要性がある場合には、会員に報酬を与えることができる（2000年12月7日法律第18条第2項、第19条第383号）。

### ■参加組合 Associazione in partecipazione

イタリア民法に規定される典型的な契約で（雇用契約とは異なる）、営利企業の労働力や資本の拠出を伴う株主形態を意味する。拠出金は資本性のものであってもよいが、労働者の拠出金、または資本と労働の混合拠出金で構成されている場合もある。会員は、提供した拠出金の対価として、契約満了時に、拠出した資本金に加え、合意された割合で利益を得る権利を有するが、損失は拠出額を上限とする。

(序章より抜粋)



写真 20 市民菜園の入り口



写真 21 市民菜園の様子



写真 22 市民菜園からレストランへ



写真 23 建設中の温室

の補助や、警察への付き添いまでで支援が終了（別の支援の枠組みに引き継ぎ）することもある。

## ⑪市民菜園・ソーシャルレストラン

旧市街地を囲む環状道路を出たところに位置する。ここはかつて保健所の土地であり、精神病患者の療養施設とそこで園芸療法を行うための畑として使われていた場所である。現在、この敷地の中ではいくつかのプロジェクトが行われている。

### ■ 市民農園

敷地内で行われているいくつかのプロジェクトのうちの一つが1990年から市が始めた市民菜園で、運営はアソシエーションに委託されている。以前の精神病患者の療養施設と農園は組織的な運営が悪く、保健所から市が引き取って、市が市民向けの農場にしようと計画した。ここは、旧市街から数分で来られるという立地で、春から夏の暖かい時は市民が喜んで利用する場所になっている。一人でもファミリーとでも、歩いても自転車でも来られ、日向ぼっこをして芝生の上で寝ることも安全な場所である。

畑は178の区画に分けて貸し出しされており、65歳以上の市民が対象で、当選すると無料で使用できる。ウェイティングリストには30人くらいの待機者がいる。6ヶ月放置禁止、野菜を育てること、所得は中低所得、田畑を持ってない都市部に住んでいる人、リクエストした順番に抽選、等のルールがある。しっかり手入れをして農作物を育てる人でないと貸与の契約は取り消される。

資金繰りを含む事業の運営はアソシエーションに任されているが、市も何もしないわけではなくてレストランと農園のために井戸を掘った。これは、要望を受けて実施したものである。井戸を掘るのに必要な費用は6000ユーロほどで、この費用を市が払う理由は、井戸がなかった時は散水のために水道の水を使用していたが、井戸があればその消費がなくなるという経済的合理性による。178区画の畑があって、畑の使用者は好きな時に好きなだけ水を汲み込んで使用するためそれなりの量となる、と試算し、井戸があることのメリットを説明して市の側を説得して理解してもらったのは大変だった。試算によれば、井戸を掘って水道水を使わなくなったら、1年間で十分

に元が取れる。経済的合理性に加えて、井戸水の利用には社会的、倫理的な意味もある。この地域では夏は水不足になるので、水道水を使わなくて済むことは市の水道への負担を軽減する効果がある。また、こうした形でパブリックな機能を一般市民が管理することで、公共にどんなことが必要かを市民も学ぶことができる。このようなロジックで市が費用を投じて井戸を掘ることになったのだが、ことほどさように 事業運営や事業費の引き出しに際しては説明と説得が必要である。

## ■ ソーシャルレストラン (Ristorazione Sociale di Alessandria) 4) ~7)

精神病患者の支援施設として使われていた建物が改修されてレストランとして使用されており、その経営はファビオ氏の運営しているアソシエーションに委託されている。初期の建物の状態は悪かったが、市から無償で使用許可を取り、自己資金で改修・利用している。このレストランも、人的ネットワークを作り、プロジェクトによる補助金を獲得し、今までなかった新しい形で社会的弱者を救う仕組みで運営されている。現在でも、レストランや市民農園の運営にあたって、社会的に弱い立場の移民、囚人、麻薬中毒者が就労している。

レストラン開設の経緯としては、市民農園の開設にあたり、ピエモンテ州から15万ユーロの補助金を受け、安全のために監視カメラをつけようとしたがカメラをつけるにはお金が足りない。そこで農園内の建物をレストランに改修して人が来れば、カメラを設置せずとも安全性が担保できると提案し、その提案が採択された。5年間をまず運営することとなった、という裏事情もある。現在が5年間を迎えて次の段階に入っていくフェーズである。

事業継続が叶うかどうかについては、自分たちがどれだけ社会的に有効な仕事をしているか、それを行政などに認めてもらうことが重要である。とりあえずの5年は、利益はもとより市からの補助も0でいい。そのあとどうするかは、その時にこれだけお金もかけて作った、有用な仕組みを無くすのかと行政と交渉ができる。そうした点からも、本当にパブリックな場所(市民に必要とされる公共性をもつ場所)にするということがどういうことかをよく考えることが必要である。いま、この市民農園とソーシャルレストランは、行政が運営母体ではないが、

4) PIEMONTE CHE CAMBIA (変化するピエモンテ), Ristorazione Sociale Alessandria, <<http://piemonte.checambia.org/pagina/ristorazione-sociale-alessandria/>>, 参照 2020.09.24

5) Cooperativa Sociale - Alessandria, <<http://www.coompany.it/>>, 参照 2020.09.24

6) COOMPANY &, <<https://www.diocesi.torino.it/turismo/wp-content/uploads/sites/16/2017/05/Presentazione-Cooperativa-Coompany-flyer.pdf>>, 参照 2020.09.24

7) 社会協同組合「COOMPANY &」は、1993年6月にアレッサンドリアで誕生し、連帯solidarietàと市場mercatoを組み合わせる実践的な試みを行おうとしている。タイプBの社会的協同組合の認定を受けており社会的、経済的、政治的、文化的、宗教(教会)的環境の中で、地域territorioとその基本的なニーズの分析をもとに、社会的弱者である人々のニーズに対応したサポートを取りかかりとして、数多くのプロジェクトに取り組んでいる。



写真 23 レストランから菜園方向

誰もが入ってきて過ごせる場所であり、市民にとっては公園としてパニーニョを持ってきて食べられる場所となっている。また、レストランは今は毎日 100 人以上の市民がランチにくる場所になっている。これがパブリックな場だろう、と自信をもっている。

### ■ 事業の発展

市民菜園を運営しているアソシエーションが、敷地内にあるもう一つの空き家を再生するプロジェクトを進行中である。上階は B&B を設定し、宿泊者や一般の人が来て、自分たちでパンやピザを焼けるように、下階にはかまどを作る予定である。民間企業（アソシエーションを含む組織）が、利用密度が低かった敷地に入って来て、ソーシャルな事業を起こし、入ってきたお金で社会的に困窮している人々の就業事業を回す。このように、現状は空き家にしてはいるよりも有効な使い方になっている。

春には、もともと温室があったところに新しい機能の建物をオープンできるように建設中である。市民農園を経営しているアソシエーションは収入を得ているため、自己資金で温室の再生に着手した。設計したのはアレクサンドリアの建築にかかわる市民である。市の土地に新しくできるが、市の負担は一切ない。何もなかったところに新たに建物を建てるのではなく、もともと存在したものを再生する仕組みであるといえる。

温室なのだが、ここは植物のための場所というよりも、多様な活動に使えるように想定しており、ソーシャルな性格をもった、アソシエーションの場所にしたいと考えている。この建物を新築するために、12 万ユーロの補助金を集めた。例えば結婚式を挙げるといった使い方ができれば良いと思っ、て、いろいろな使い方を考えている。

### ■ アソシエーション同士の協同（周辺のアソシエーションのネットワークをつくっている、ファビオ氏のインタビュー）

2000 年頃までは、アレクサンドリアのアソシエーション同士は資金的な競合状況であったが、それ以降は社会情勢が悪化し、競合より協働するようになり、そしてお互いにコラボレーションすることで利益を生むようになった。これからのフェーズとしては、街の職人や商人等、多様な街の人々を巻き込むプロジェクトを推進したい。相互の話し合いを進めるうちに、多様なステークホルダーのネットワークが形成され、コラボレーションを



写真 24 右手奥にあるのが、今後改修する建物

する意思があることが見えてきた。

この市民農園には以前にもアソシエーションがあったが、上手く機能しておらず、きちんと管理運営されていなかった。そのときには、利用者間で喧嘩になることもあったが、今はなくなった。運営がきちんと入って、ルールができて、コミュニティができた。4/5の畑は、使えていなかったが、運営の整備によって、きちんと手入れをしなければならなくなった。もともと畑を使っていた人たちからは文句もあったが、今ではコーディネートされた場所になったと、理解されている。私たちは活動のなかでよくありがとうと言われるが、いろいろな立場の人たちがいて、協同することで、うまくいっている。

まちには、住民や生活・支援のニーズなど、いろいろな変化がある。やってくるものをどうやって受け入れて、どうやって良い方向に持って行くかの準備をしておかないといけない。自分たちの街も1000年も前から変化し続けているわけで、変化することは自然なこと。ただし、変化に対しては、人間は抵抗することがある。変化に対



写真 27 セカンドハンズの内観

内装にはお金をかけていないが、印象的なラインがデザインされ、しゃれたイメージである。



写真 26 セカンドハンズの外観



写真 28 工房の中

移民の女性たちが洋服の修理のワークショップに参加していた。

しては絶対になんらかの抵抗がある，ということは心得ておかないといけない。変化への抵抗があるということを前提にして、それでも「その時」に、変化と変化への抵抗とを受け入れてどんな変化につなげていくか、関係者が一緒に考えていく。

この敷地で、ソーシャルレストランのプロジェクトをやろうと COOMPANY & が考えたとき、市民農園の方はうまく機能していなかった。その運営をしていたアソシエーションを追い出すこともできたが、そうではなくて相互に連携することでアソシエーションのネットワークに取り込んだ。本当の変化は、この建物がソーシャルレストランになったということではなく、農園を管理するアソシエーションの人たちが仲間となって事業を展開できるようになったこと。他から解決されるよりも、自分自身が変わることで問題が解決できるようになる方が嬉しいもので、活動がより活発になっていく。

## ⑫ 空き家再生の工房付き Second Hands (リサイクルショップ)

店名は Second LIFE。不用品を回収し、それらを安価で販売する店舗である。最も安い品物は1ユーロ。もともと木工所の事業所であったが、空き家になり、そのまま放置することが治安の悪化にも繋がると懸念して、COOMPANY & の新しい事業として開店した。新規の物件は負担にもなるが、家賃を安くしてくれたこともあり事業をスタートすることができた。改修にあたり、外観や内装を見違えさせるような完璧な改修をするのではなく、元の記憶・形状が残る形で改修することで、この地域での馴染みの感じを出そうとした。そこで、経費の3万ユーロを補助金等で集めて、電気と水回りと窓だけ直してもらい、あとは自分たちとボランティアでペンキを塗ったりして仕上げた。

市民の人たちが、洋服、バック、靴など、使わ

なくなった品物を寄付してくれ、受入が1日に何百キロになることもある。奥に工房があり、そこで使えるものを選んで、洗ったり修理して商品にする作業をしている。この作業も、就労支援事業の一環になっている。ほかに、縫い物教室などを行っている。

寄付された品物を貧しい人に「あげる」こともできるのだが、施しものではなく、安くても自分のお金で「買う」ことが大切であり、それは人間の尊厳に関わるからである。そのため、低賃金でも買えるように価格をごく安く抑えている。縫い物教室を開いて技術を身につけることで、家族の服を自分たちで繕って使うことができるようになり、またこのようなりサイクルショップ等での就労につながる可能性もある。